

1 掃除をしてたら見つけた自分。

掃除をしていたら、なんとなく本棚の片隅にヨレッと傾いて辛うじて立っている貧相な小冊子が目の端に留まり、掃除機のスイッチをとめて、手に取ってみた。

その小冊子は僕が10年前に書いて自分で手作りしたエッセイ集、とも呼べなような、書いた原稿をコピー用紙にプリントして二つ折り、端を大型ホチキスでバチンバチンと止めて本の体裁にしただけの、本当に原始的で、誰かに読んでもらうことを前提にしない、エッセイなどとも違う、日記のような備忘録のようなモノ。すっかり忘れていた。

貧相な小冊子と書いたが、確かに貧相ではあるけど、でもね、中々のポリウム感がある。

そりゃそうだ、10年前のある時期、五ヶ月間にわたって誰かからのオファーがあつたワケじゃないのに、毎日毎日、原稿用紙3枚分くらい書き続けたものだから、それなりの分量にはなるんだね。

だんだんと思ひ出してきた。その小冊子、改めて眺めると、表紙といい、本文の読みやすい文字レイアウトといい、なかなかデザインの完成度が高いのだ。

「これこれこういう文章を自分よがりを書いていて、手造り小冊子のようなものを作りたいんだけどさ、デザイン、お願いできないかな？」と当時仲良しだったデザイナーにブックデザインを依頼したところ、「売れる物にもならない、一円の得にもならない、そういうデザインするのダイスキ！」と、シャレの分かる彼は積極的

に参加してくれたのだった。

で、肝心のその小冊子の内容は。

ヘビースモーカーの自分が禁煙を決意して実行し始めた日からの「禁煙日記」。恐らく、相当キツイであろう禁煙の日々を、ただ苦しんでいるのはヤダ。そうと決めたらオレもモノカキの端くれさ、タバコを吸わないことで変化する自分の体調やニコチンから遠ざかる恐怖と苦しみ、キモチの変化、周囲の人達との空気の变化、なんだかさういふコトを「書いてみる」という楽しみに変えてみよう、と思つたのだった。禁煙ツラい、というキモチを楽しく書いてみよう。

なんだか、僕、前向きじゃないですか？

ま、それはさておき、その誰にも頼まれたわけでもなく勝手に書き始めたエッセイ風の禁煙日記を、当時からりつけだったクリニクの主治医に読んでもらったわけです。そのクリニクには約週イチで通っていた記憶があるので、週イチでその週に書いた原稿を読んでもらう、と。それが約5か月続く、と。相手の主治医にとっては週一の連載エッセイを読まされているという気の毒な状況である。ところが、主治医が読むにはとどまらず、そのクリニクのナースさん達にも禁煙日記風エッセイは中々の好評で「早く来週号が読みたいわあ」などの声が聞こえてくる始末。やがて、そのクリニクに入り込んでいる某薬品会社の営業のヒトがそれを読んだらしく、うちの会社で出版しないか、というハナシにまで発展。で、盛り上がって

エッセイスト 北園修

横浜生まれ、横浜育ち。
東京コピーライターズクラブ在籍。
クリエイティブディレクター、エッセイスト。

た矢先にその製薬会社が取り扱っていた禁煙補助薬品関係で悪いうわさが流れて僕の出版のハナシも何処へやら、という顛末。ま、僕の人生、いつも、そんなもんだ。でさ、そんな10年も前に書いた、僕の中から生まれたにもかかわらず、ずっと忘れていたその文章を読んでみて思ったのは、「10年前のオレ、面白いじゃん！」ということでした。目的も読まれるあてもなく書かれた文章だからか、完全に自由な「跳ね」があるというかね。じみじみな禁煙ライフを毎日エッセイ風に、時には自分に説教していたり、褒めていたり、一々の変化について真剣で間抜けな推察が描かれていたり。やっぱバカ一直線だな、と改めてそして初めて、自分で書いたモノで少しだけ笑つたな。いつもは、自分で書いたものは、恥ずかしくって読み返すことなんか無いのになあ。掃除中、突然出会った10年前の僕の暮らしてはバカバカしくてよし。

さて、4月です。これからおヒマな時にゆるゆると読んでいただければ嬉しいな。



Photo:藤間 久子「Slowly」

岡山県生まれ。JPS(日本写真家協会)会員。カメラマンとして活動の傍ら、個展やフォト&エッセイなど自分の作品づくりに励んでいる。